

アブシヤロムの死

(ヨサムエル18・28～33)

一、人への評価はむずかしい

聖書に登場する人物をどのように評価するかは、なかなかむずかしいと思われまふ。例えば、ダビデ王です。ダビデは、取り返しのつかない罪を犯した後、それを深く悔い改めました。その後のダビデの姿には、悔い改めの実が見えます。そうしますと、私たちはダビデを寛大な目で見てしまい、その後のダビデの行うことを、無批判に受け入れてしまうようになります。

ですが、ダビデの行動は模範的だったのでしょうか。それについては、サムエル記の著者がどういう考えをもつて記したかを読み取る必要があります。それをしなければ、自分勝手に判断してしまふことになるからです。

二、聖書の物語に聞く

ダビデは、自分の身から出た息子アブシヤロムの目に余る行動に当惑しつつも、息子を受け止めていました。もちろんアブシヤロムの行動が良いとは考えていません。何とか、神の御心にそって解決するように祈り、神に委ねていました。時に、ダビデの友であり知恵者でもあったフシヤイが、ダビデによつ

てアブシヤロムの下に遣わされます。

アブシヤロムの謀反には、アヒトフェルという知恵者が加担していましたが、彼らの目論見がうまく行く可能性は大きかったと思われまふ。ところが、

知恵者フシヤイがアブシヤロムの下に遣わされ、彼がアブシヤロムの求めに応じて発言すると、状況は変わりまふ。その出来事についてサムエル記は語っています。17章14節です。〈アブシヤロムとイスラエルの民はみな言った。

「アルキ人フシヤイのはかりごととは、アヒトフェルのはかりごとよりも良い。」と。この言葉に続いて、著者による解説が続きます。同節後半です。〈これは主がアブシヤロムにわざわいをもたらそうとして、主がアヒトフェルのすぐれたはかりごとを打ちこわそうと決めておられたからであった。〉と。サムエル記の著者は、単に歴史家として出来事を記録したのではなく、しっかりと自身の見解、すなわち神学を持って記しました。著者は、主なる神がこのようなり方でアブシヤロムとアヒトフェルの陰謀を打ち砕かれたと、確信を持って記しています。

その後、アブシヤロムは全イスラエルを率いて父ダビデ王に戦いを仕掛けます。ダビデ王としても応戦せざるを得なくなりまふ。その際、ダビデはアブシヤロムを殺さないようにと部下たちに命じまふ。戦いが始まり、戦場に

なつたのは「エフライムの森」と言われる所でした。そこは、藪と岩場が入り交

じつた場所だつたようです。その戦いで、アブシヤロムに付く多くのイスラエルの民が死にまふ。そしてアブシヤロムも密林の犠牲になりました。アブシヤロムの頭が樫の木に引つ掛かり、宙づりになり、動けなくなつたのです。動けなくなつた原因が、アブシヤロムに備わつていた豊かな髪の毛（ヨサムエル15・26参照）にあつたとするなら、皮

肉です。神が備えられた身体的な特性、すなわち賜物が、御心に逆らふことにより仇となつたからです。アブシヤロムは將軍ヨアブによつて命を絶たれまふ。ヨアブはアブシヤロムを殺害することが、ダビデ王の意に適わぬことを知つていました。しかし、ダビデ王の常軌を逸した息子への愛を放つておくなら、再び問題が起きると知つていたゆえに殺害したものと思われまふ。ダビデは息子の死を、將軍ヨアブが遣わしたクシュ人から知らされまふ。18章32節です。〈クシュ人は答へた。「王さまの敵、あなたに立ち向かつて害を加えようとする者はすべて、あの若者のようになりまふように。」と。ダビデ王はどう

したでしょうか。33節です。〈すると王は身震いして、門の屋上に上り、そこで泣いた。彼は泣きながら、こう言い続けた。「わが子アブシヤロム。わが子よ。わが子アブシヤロム。ああ、私がおまえに

代わつて死ねばよかつたのに。アブシヤロム。わが子よ。わが子よ。」

読者は、ダビデが息子の死を嘆いてるところに、ダビデの情の深さを評価するよりも、主の御心から外れた、愚かしさを伴つた愛情を見まふ。そして、それはそのまま著者の、ダビデ王に対する評価となつていまふ。

三、ダビデのまちがい学ぶ

アブシヤロムは超えてはならない一線を超えてしまひまふ。サムエル記の著者は、アブシヤロムが神に裁かれたと捉えていたと思われまふ。

ダビデがそういうアブシヤロムを愛し続けたのは、良かったのでしょうか。半分は良かったはまちがつていたのでしょうか。半分は良かったはまちがつていたと思われまふ。良かったというのは、ダビデが息子アブシヤロムへの愛情を持ち続けたことです。まちがつていたというのは、愛し方をまちがえたからです。真に息子を愛するということなら、息子に、神を畏れ敬ふことを教えるべきでした。そこから外れてしまひまふと、有害な愛情へと墮ちてしまひまふ。

御心になつた愛情を持つのは、簡単なことではありません。しかし、人にはできないことが、神にはできるので、と、そのように、信じたひです。